

(社) 東洋音楽学会関西支部 支部だより

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 3 6 号 (1999/10/28)

♣定例研究会のご案内♣

●第196回定例研究会

と き：1999年11月28日(日) 14:00~17:00

ところ：京都・東本願寺および大谷婦人会館(大谷ホール)

(⇒次頁の地図を参照ください。なお、当会館には駐車場はありません。)

(1) 拝観・見学(東本願寺御影堂) 10:00~12:30

東本願寺の報恩講最終日(含、坂東曲=ばんどうぶし)

(2) 講演と研究発表(大谷婦人会館) 14:00~16:30

講演 「報恩講の構成と坂東曲」

..... 岩田 宗一

研究発表 「真宗大谷派声明の音楽学的研究

——クリイリバネの実践上の多様性について——」

..... 澁谷 由美

●第197回定例研究会

と き：2000年2月19日(土) 13:00~17:00

ところ：大阪国際女子大学5号館8階817号室

(守口市藤田町6-21-57 TEL 06-6902-0791

京阪電車「大和田」あるいは「萱島」下車。徒歩10分。

正面玄関からおはいりください。⇒次頁の地図を参照ください。)

シリーズ「伝承を考える」その9

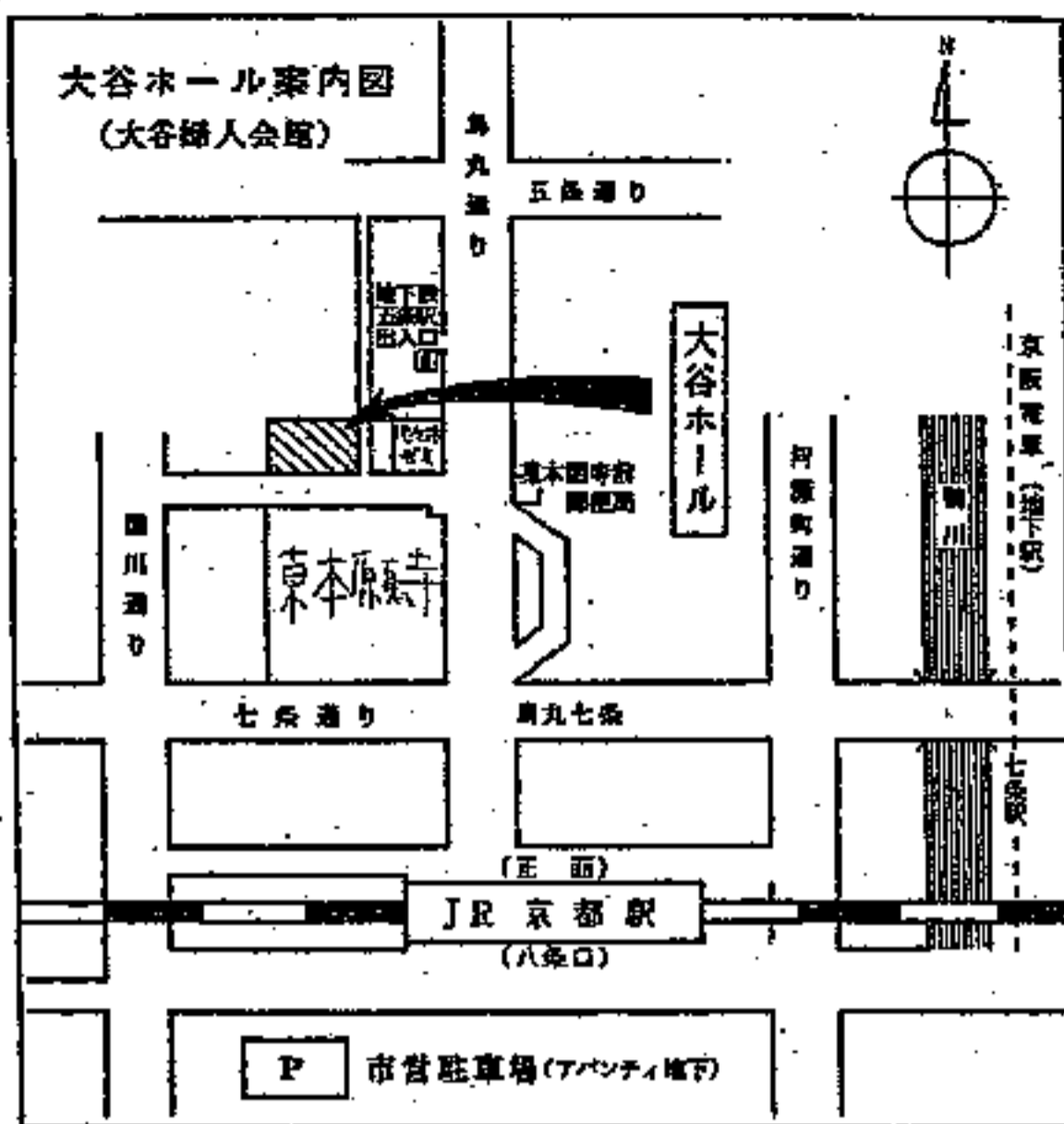
シンポジウム「日本の音楽を海外にハッシンする」

パネリスト：シルヴァン・ギニャール 田中悠美子 寺内直子

司 会：藤田隆則

第196回定例研究会

午前中、坂東曲で名高い東本願寺の報恩講最終日を見学します。坂東曲は東洋音楽学会第42回大会（龍谷大学）で実演されましたが、今回はそれを実地体験します。当日は参拝者で大変混み合いますが、東本願寺式務部のご好意により、東洋音楽学会員のため、見学場所を確保していただいています。拝観ご希望の方は、午前9時30分までに、東本願寺御影堂正面階段上左端でご待機ください。なお午後は、大谷大学名誉教授・岩田宗一先生から報恩講についてご講演いただく予定です。



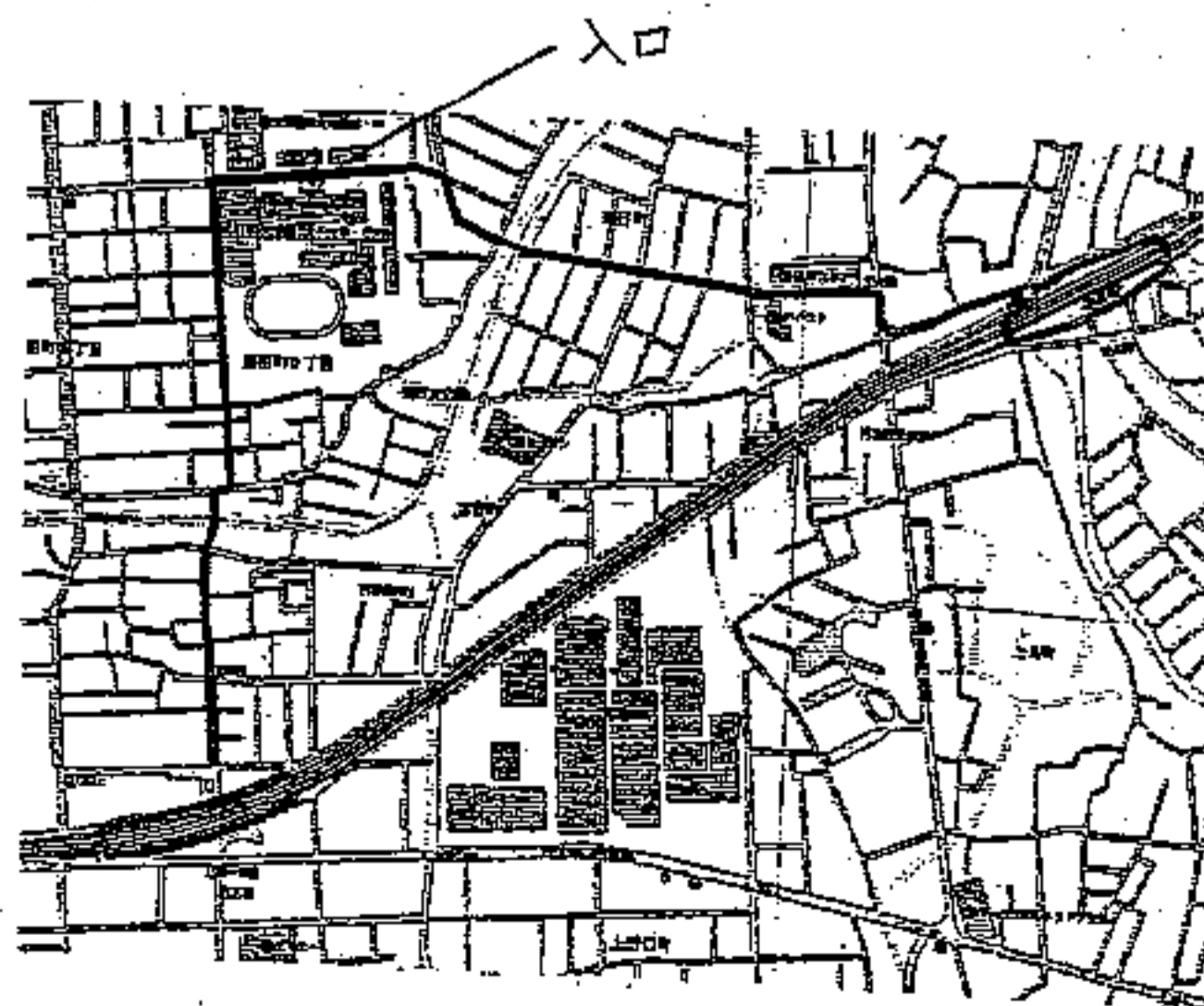
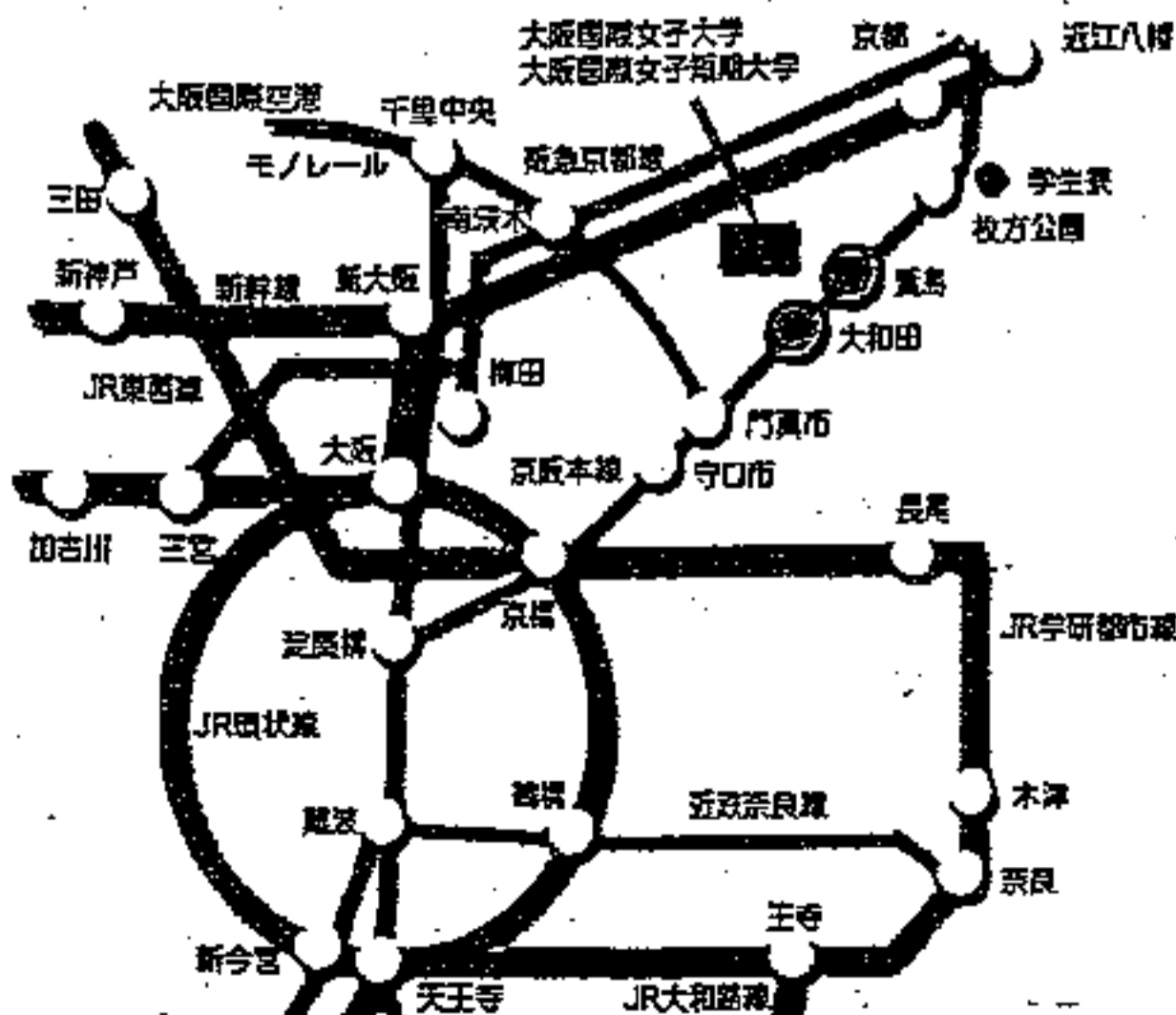
第197回定例研究会

さまざまな場所・場面で、日本の音楽が海外に発信されている。音楽学者もそういった場所・場面にかかわっている。たとえば、講義やワークショップなどをつうじて、そういった活動をみずから展開する場合もあるだろう。また、そういった活動の受け手・享受者として、外側から観察をおこなう機会を与えられているかもしれない。

ここに、日本音楽を海外に紹介する活動に積極的にかかわってこられた音楽学者および演奏家のかたがたに集まっていただく。そして、紹介活動・演奏活動を展開するさいの、困難な点や問題点などをいろいろと指摘していただく。これらの指摘のなかに、音楽学のあたらしいテーマをみつけだすことができるだろうか？

シンポジウムの大きな問いは、次のようなものである。「海外への発信は、研究者がエネルギーをかたむけるに価する、豊かな場所・場面なのだろうか？」
「また、研究対象として、豊かな場所・場面なのだろうか？」

フロアもまじえて、いろいろな問題をだしながら、雑談する場にしたいとおもう。なお、パネリストの演奏（デモンストレーション）もまじえつつ、議論をすすめたい。（文責：藤田隆則）



東洋音楽学会関西支部第195回定例研究会 報告 大谷紀美子
1999年9月25日(土) 14:00~17:00 国立民族学博物館

- (1) 研究発表「土地の声とパフォーマンス—ヤップ島の踊りをめぐる考察—」
小西潤子
- (2) 特別講演「トルコのマカーム研究における歴史的変遷の過程」ロベルト・ガルフィアス (カリフォルニア大学アーヴァイン校人類学教授/民博客員教授)
- (3) ギャラリートーク&ミニコンサート：日本のジャワ・ガムラン

195回の定例研究会は国立民族学博物館の共同研究会「民族音楽学の課題と方法」(代表者：水野信男)と共同で開催された。3時間という間に研究発表、特別講演、さらには博物館内の特別展示場に移動してミニ・コンサートを鑑賞するという盛り沢山の、充実した内容だった。しかし、小西氏やガルフィアス氏の講演の後、質疑応答の時間が取れなかったのに不満を感じた参加者があったかもしれない。

小西氏はミクロネシア連邦ヤップ州、ヤップ島の人々が行っているチュル(踊りの総称、踊り歌も含まれる)を土地の声、ピルンや精霊、カーンとの関係で考察を行った。カーン(悪霊と訳されることもある)の信仰はキリスト教がもたらされて以来断絶したが、チュルのパフォーマンスの中に存在していると結論づけた。

ガルフィアス氏は最近ではそれができないうコンピューターをつかっただけの講演であった。まず、最初にオットマン・トルコの音楽の概略：起源、宮廷音楽の歴史等、が説明され、当講演の中心となるマカームについてのお話だった。トルコのマカームはメタ・メロディーあるいは旋律のメトリックスのようなものだと解説。最後にマカームによって作曲された数曲の演奏がスクリーン上の記譜とともに紹介された。ガルフィアス氏の講演は巧みな日本語で行われたことをつけ加えておく。

「日本のジャワ・ガムラン」は1940年に小林一三氏によって日本に持ち込まれたガムランのセットが最近ジャワ島で修復されたが、それを使用して本学会会員、中川真氏とマルガ・サリによる演奏であった。器楽演奏の他、トペンの舞踊も行われた。また、演奏に先立ち、中川氏の解説があった。私たちは会場の床や階段に坐ったり、2階の特別展示を見学しながらガムラン演奏を鑑賞した。

会場が交通不便なせい、9月末というのに残暑が厳しかったからか、会員の出席が少ないのが残念であった。

東洋音楽学会関西支部194回定例研究会(日本音楽学会合同) 報告 和田垣 究
1999年7月3日(土) 14:00~17:00 大阪音楽大学K号館

- (1) シンポジウム「本土のなかの沖縄音楽文化 — 関西在住ウチナーンチュ(沖縄人)へのアプローチ」

パネリスト：岩井正浩(神戸大学)、寺田吉孝(国立民族学博物館)、
成定洋子(大阪大学大学院)

司会：井口淳子(大阪音楽大学)

- (2) 島唄ライブ 唄・三線：宮里政則(大正区在住、嘉手納出身) ほか

午前中、早くも30度を越えたというカンカン照りの沖縄とは対照的に、大雨が心配な当日の大阪。しかし、その沖縄をはじめ、遠来の出席者に唄・三線も加わった活気のある会となった。

関西在住のウチナンチュは、それ相応の歴史を有し、今や本島とは別個に独自の文化を育てつつある。にもかかわらず、これまで音楽学者による本格的な研究がなされてこなかった。そのため、実情に即した新たな研究方法を模索するべく、当シンポジウムが企画された。パネリスト各氏は、まず岩井氏が、阿波踊りをはじめとする徳島の民俗芸能と沖縄の踊りに注目し、海民文化の伝播・交流について述べ、続いて寺田氏が、北米におけるフィリピン系移民の文化研究を参考に、研究者と被研究者の共同作業の重要性について、最後に成定氏が、文化人類学の立場から、24年前に在阪ウチナンチュが始めたエイサー祭への参加体験を通じ、地元大阪でのウチナー文化のありようを自身の人生に重ねて学びたいと述べた。

ただ、今回の音頭取りである井口氏が、「芸能と政治を切り離してほしくない」と在阪ウチナンチュに言われ、「これまでにはない壁にぶちあたった」と語るように、研究者＝ヤマトンチュ（本土人）、対象＝ウチナンチュという構図、そこに見える植民地主義的態度等々、考慮すべき問題は多い。とはいえ、ウチナー文化を受け入れ、変容を促し、それがまた本島に影響を与えるという点で、大阪そして関西がキーとなったことは否めない。学際的研究も含め、今後の方向をさぐるきっかけにしたいということで、前半のシンポジウムは閉じられた。

ところで、私自身は、韓国の音楽・芸能をきっかけにアジアへの関心を持ち始めた。沖縄の音楽も好きで、エイサー祭にも何度か出かけている。今回、井口氏やパネリスト各氏の発言を聞きながら、かつて韓国の太鼓（杖鼓）を習得するため、大阪の在日コリアンと接触した自己の経験と重なることに、あらためて気づいた。

後半は、宮里氏とお弟子さんの島唄ライブである。宮里氏のご厚意による琉球舞踊、二人の若者の三線・笛の飛び入りもあり、にぎやかなひとときになった。最後は定番のキャチャーシーであった。この踊り方は、阿波踊りはもちろん、韓国やバリなどの所作にも応用がきき、日ごろ何らかの関連を感じていただけに、岩井氏の研究には興味をおぼえた（今回は踊りそびれ、甚だ残念であった）。

●関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

研究発表等は下記の事務局までお申し込みください。その際、発表の種別（連続講座「伝承を考える」、研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など）、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記してください。

（社）東洋音楽学会関西支部

〒673-1494 加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学芸術系教育講座 水野
研究室気付 ☎&FAX 0795-44-2261 FAX専用 0795-44-2259
電子メール mizuno@art.hyogo-u.ac.jp